

カトリック 仙台教区報

2002年10月20日 No.148

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任者 本部事務局

広報担当 田中丈夫

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

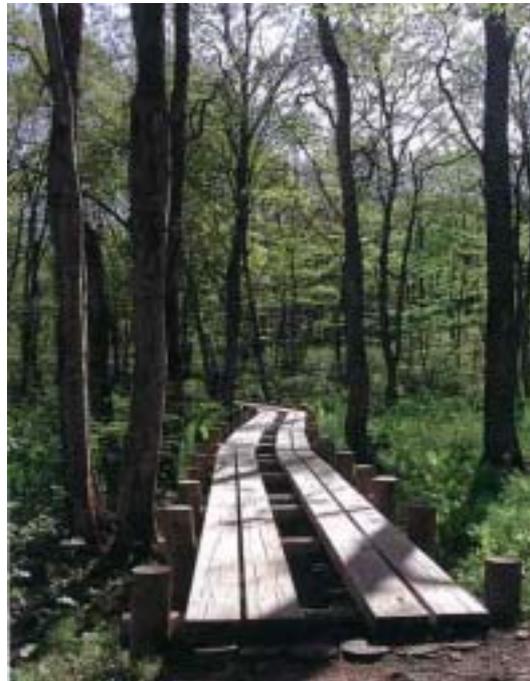
死を思う

仙台教区 司教 溝部 脩

私は大分県別府市で中学時代の過ごししました。穏やかな別府湾と九重連山につながる鶴見岳が聳える美しい町です。温泉が豊富で、毎日温泉に浸かって私は育ちました。私は父母の墓を、郊外にあるカトリック墓地につくりました。海が真下に見える眺めの良い場所です。当時の主任神父さまはイタリア人でしたが、信者を動員してこの墓地を作ったのでした。毎日労働、労働で、日曜日は老いも若きも階段をつくる作業に従事したものでした。

今行っても、実にすばらしい仕事をしたとの実感がありません。懐かしい人たちがずらりと並んで、墓地は私に多くを語りかけてくれます。信仰を伝えて下さった神父様たちの墓もずらりと並んでいます。私の墓地もここに準備されています。別府

たちを思い出して祈るようにと勧めていました。ミサのために使う奉納金を、大事に拝むようにして受け取っていたのも思い出します。命日に家族全員で教会に来て、一緒にミサに与る習慣もありました。通夜でロザリオを何連も唱えたのを思い出します。残念なことに、いつのまにかこのような習慣も廃れてきている感じが



カトリック教会は、やはり私の魂の故郷です。ただ、今仙台にあって、さて私はどのようにすればよいのか迷います。

カトリック教会は常に死者を大事にしました。昔のローマのカタコンブを見れば、それが教会の伝統だということに気づきます。昔神父様たちは、懐かしい人々の命日にはミサをお願いして、その人

カトリック教会は十一月を死者の月としています。今年には家族の命日を確実に守ってみてはいかがでしょうか。しかも、それを形だけのものにしなくて、家族全員で一緒に祈る日にすればいかがでしょうか。同時に「もの思う季節」であることも考え、人生をしつかりと見つめる時とするのも良いことではないでしょうか。

【写真はラサール会 Br フィリップ・ラポイント氏が撮影したものです】

残滴

洗礼を受けて私たちはカトリック信者になり、その日からの生涯が信仰生活になる。その信仰生活だが、いったいどのようなものだろう。何かはつきりとはつかめない。一方、福音宣教は信者の第一の使命だと言われる。だとすると、「福音宣教のため

に」を中心にするのが信仰生活と言ふことになる。つまり常に福音宣教のための生活である。それでは宣教師が伝道士のようにと思われようが、そうでもない。直接宣教なる言葉は無いだろうが、間接宣教と言つてもいい。むしろ福音宣教を広くとらえ、或いは準備宣教とでも言おうか。もつとずばり言つてしまえば、日常接する他人に対して、神様を感じさせる生活であり、少なくとも信仰を疑われない生活である。容易に見えても実は難しい。具体的には本人次第だが、福音宣教の初歩的知識はあつたほうがよい。先日、急逝された島本要長崎大司教様の著書「福音宣教」をお奨めしたい。聖母の騎士社の文庫本で定価五百円。内容は深いがそれほど難しいものではない。何度も読んで、その幾分かでも頭におけば、信仰生活は恐らく、もつと濃いものになるだろう。(平)

れるなど活発な討議が行われた。本議案については今後司牧評議会役員会において更に検討を進められた上で教区内各小教区に周知することとした。

なお、定例会議報告は各小教区宛に送付されているので、詳細を知りたい方はその定例会議報告を参照されたい。

司祭評議会、最近の動き

司祭評議会の呼びかけにより八月二十六日(月)教区内四県(倉森・岩手・宮城・福島)それぞれで県司祭の集いを開催した。今回は教区司祭団月例会をこの司祭の集いに振り替える等対応した結果、充実した集いを持つことができた。

今回開催された県司祭の集いは各県で働く司祭が、それぞれの所属(教区司祭か宣教会司祭か修道会司祭か)を越えて、一つに集まり各県で共通に抱えている課題について共通に話し合う場を持ったという点に大きな意味があった。しかも、休暇で日本を離れている司祭、病気の司祭を除いてほとんどの司祭が参加したという意味では画期的なものであった。話し合いの内容に関して

は県毎にいくらかの違いはあったものの、九月二十三日開催の司牧評議会定例会議の議案について話し合うことができ、また各小教区において司祭不在の主日の集会祭儀が現実にとりよ様に準備されているか等の意見交換が行われた。

今後各会(教区司祭・宣教会司祭・修道会司祭)の集まりは大切にしながらも、会の枠を越えた県毎の司祭の集まりをさらに充実させてゆきたいとの要望が多

く司祭から寄せられた。

八月十九日起工式が行われたその後、建築作業は順調に進んでいる。九月下旬に行われた土台部分のコンクリート打設のときには、ミキサー車約二十台が入り、天候だけではなく近隣への迷惑も心配されたが、事故もなく最高の天気にも恵まれ、しっかりとした土台が据えられた。

司教館建設 順調に進む



た。柱などの立ち上がり部分のコンクリート打設も終了。間もなく木材が搬入されて建物の骨格が組み立てられることになる。小聖堂にはステンドグラスが入られるが、その前に修復が必要で、その作業小屋もできた。(このステンドグラスの由来については次回に紹介。)

深沢神父 新作発表

『トラピストの晩鐘』

深沢守三師(八十六歳)は広瀬河畔(仙台市青葉区の大橋近く)のカルワリオ神父等(仙台台広瀬川キリシタン殉教碑)作者。今回『トラピストの晩鐘』を宮城県芸術祭に出品したのも、宮城県芸術協会彫塑部の会員で

ある師としては、「自分の務めを果たしたようなもの」とお話し。「今まで展覧会には宗教的な作品は出品してこなかったが、今後宗教的なものを作りたい。」と力強く語ってくださった。今回は若手育成とのことで受賞を逸したが、今まで数度にわたり数々の賞を受賞している。



第39回宮城県芸術祭(2002年)出品作
「トラピストの晩鐘」 深沢守三神父作



青森 三沢教会

カトリック三沢教会を詳しく紹介する前に、少しだけ三沢市のことをお話ししましょう。

三沢市には、戦後、米軍三沢基地が建設され、現在でも多くの米国家族が住んでいます。また、隣接する六ヶ所村に建設中の核燃料サイクル施設では、多くのフランス人が技術協力者として働いています。このフランス人たちは、家族とともに三沢市や下田町に住んでいるのです。そして、三沢市の大きな宝物が昨年五十歳になったカトリック幼稚園です。これまでに四千八百人もの子供たちが、神様のお恵みと皆様の愛に満ちた支援を受けながら巣立っていきましました。現在は、カトリックの大きな家族が教会に隣接する園舎で育っています。さて、三沢カトリック教会には、毎週日曜日のミサに、米国人やフランス人も集まっています。でも言葉の壁はほとんど



ありません。アンドレ・レウエイエ神父様はカナダ人で、英語よりも日本語が上手。ミサも日本語、英語、フランス語で行われるのです。ただ、神父様は、「今、何語を話してあげなめ」とおどほけになり茶目、気たつぷりに笑っておられますが・・・。

昨年のクリスマスには三人の子供たちが初聖体を頂きました。その後のパーティーも国際色豊かだったことと言ってもありません。ご自慢の自家製ケーキやお料理が小さな教会のテーブルいっぱい並べられるのですから。

皆さんもぜひ一度おいでください。お料理を一品も忘れなめ。

岩手 久慈教会 (堀 憲一)

岩手の北端に位置する久慈市は、すばらしい海と景色に恵まれ、北限の海女(あま)、一はくの街、地下備蓄等々、大きなシボルがあります。久慈教会は、来年五十周年を迎える節目にきています。主日は十人前



後の小さな集い特有の家族的な教会です。

二陸鉄道のおかげで、隔年毎に持たれる岩手ブロック地区交流会は、小さな教会にとって大きな喜びと力です。

一十年前、カトリック新聞「司祭の窓」に久慈教会が紹介されましたが、その頃は色々な活動が行われていた事を思い出します。今は教会として大きな活動がなく、この地で信仰に生きる証を蓄える時ではないかと思っています。

今年はずれい集いがありました。信徒の娘さんが、カトリック信徒宣教会よりロシアに派遣されており、夏の里帰りにポーランドから宣教にいらっている神父様と寄つてくれました。活躍中の宣教者になれることはうれしい限りです。今の四代目司祭も二十六年間久慈で働いておられる宣教者です。

私たちもこの地で「地の塩・世の光り」となりたいものです。(玉置)

宮城 塩釜教会

献堂五十周年を迎えるカトリック塩釜教会は、今年九月十二日(月)で献堂五十周年を迎え、記念ミサ並びに祝賀会を開催いたしました。

教会の守護聖人は、大天使聖ミカエル。

記念ミサは、午前九時二十分より浦部司教様をお迎えして、深沢神父様・鷹尾神父様・土井文雄神父様など塩釜に縁のある神父様方さらに山教会出身の小松神父様、県内各教会の神父様方の共同司式により、献堂以来の盛大な記念ミサが捧げられました。ミサ出席者は約二七〇名、聖霊が信徒

館ホールまでをいっぱい埋めることとなりました。

その後祝賀会は、多賀城キャスル・ホテルにて開催、婦人会や日曜学校子供達による可愛い合唱で会場は盛況を呈し、五〇年間に渡る神様からの恵みと導きの賜を分かち合いました。



た。

また信徒会では、記念誌、献堂五〇年のあゆみを発行、主任司祭のアンドレ・ミンヤール神父様の挨拶をはじめとして、司教様、神父様方、塩釜に關係する方々の半世紀に渡るエピソードと懐かしい写真などで彩られております。

記念式典に出席した皆様方は、神様からの恵みの賜を感謝すると共に、

これまで教会を支えて下さった多くの神父様並びに今はなき諸聖人の苦勞と信仰心の偉大さに思いを馳せました。(高野 十明)

福島 平教会

昭和二十二年十月十三日、一口神父様が平市に着任し、布教活動に入りました。

当時は戦後の食糧難の時代で、布教活動も大変苦労されたそうです。あれから五十四年が過ぎ、庭の木々も大変大きくなり、街の中にあつて、森の中の小さな教会と呼ばれております。教会周囲をいわき市立美術館や文化センター、NTTと高い建物に囲まれ、いわき市の行政や文化の中心を占める場所となりました。

グロトリック神父様には五十二年間の永きにわたり、ご指導頂きました。平のこの地に教会堂を建てよと神父様は母国の力ナダへ帰国する度に親族や友人の方に募金をお願いしておられたのでした。その意を我々信徒も知ることとなり、信徒の募金積み立てが始まったのでした。残念ながら、神父様は二〇〇〇年十一月二十六日



新しい教会堂を見ることなく帰天いたしました。私たち信徒一同、神父様の意志を継ぎ、「教習建設委員会」を設立して自主活動中です。現在の教会堂は老朽化が進んでおり、一日も早く完成を目標に頑張っております。(吉村)

長崎巡礼

弘前教会 渡辺健二
 弘前教会では「溝部司教様と長崎巡礼の旅」に行つて来ました。参加者は県外の人も入れて二十二名でした。日程は八月三十日から九月三日まで。通過地は佐世保 田平 平戸 生月 外海 長崎でした。台風十五号が九州に接近しているという朝のニュースを聞き、心配しての青森空港からの出発でした。でも、無事、予定通り福岡空港に到着しました。空港では司教様が待っていてくださいました。旅行中は毎日、ミサがあり、又、バスの中の司教様の霊的

私の気分転換

盛岡・四ツ家教会

関谷 秀雄

昨日岩手山に登つて来ました。エゾリンドウに秋を見つめました。今朝は気分爽快です。何しろ快食、快眠、快便で、脚の筋肉にも張りがありますから。体のリフレッシュが、気持ちも新鮮にしてくれます。退職したからといって、しょっちゅう山に行けるわけではありませんが、私の生活の中では、「山」は大切な世界です。「晴山雨読」の毎日ですと人

話はキリスト教迫害の歴史と殉教者の信仰についてでした。最終日の大浦天主堂のミサの説教では、この聖堂にある殉教した信者たちの思いと信仰心を感じ取つて欲しい。私たちも毎日の生活において、殉教を黙想することですごして欲しい。大浦天主堂の持つている苦難を耐えた信者達の信仰が醸し出す「気」を感じ取つて欲しいとも言われました。

台風を大変に心配したのですが、少しだけの変更ですみました。六つの教会を訪問し、各教会でお茶とお菓子の接待を受けます。お話しも出来て大変に感謝しています。信仰の歴史の深い地の信者の皆様から大きな刺激を受

には言っています。

今は宮古にいらつしやるスイス人のヨセフ神父さんは、秋田駒が岳から北アルプス、ヨーロッパ・アルプスまで登られました。「神父さんは、どんな思いで歩いていらつしやつたのかなあ」と想像していましたが、この頃それが少し分かるような気がします。

ちよつと裏の山(岩手山)に出掛けて来るのも、今年登ったモン・ブランも、「神の庭に遊ぶ」のは同じだからです。さあ次は、いづくに遊びに行こうかな。

修道会紹介

青野木修道院
 聖ドミニコ女子修道会

仙台の西郊外にある「青葉区芋沢青野木」の地に根ざして二十数年になる青野木修道院は九つある日本管区聖ドミニコ女子修道会の一つの修道院です。

青野木という地の利を生かした来訪者の歓迎が、主な仕事で、メンバーは八人です。

野菜類を美味しくする光と風そして緑と空間、ゆったりとした時を分かち合う「ドミニコの家」は、個人、グループを問わず黙想、憩い、研修、キャンプにとカトリック教会のみならず、広く多くの人々に多目的に使われております。入口の桜並木を通り抜けると深呼吸が出、大空を仰いで、しばし沈黙がある皆様の姿は、人間本来の感性が創造の御業と解け合っているようです。

観想こそ福音宣教の源泉と考えた聖ドミニコに倣い、時代の求めに応じられる修道院になれますように。「愛の花びらは神様に、そしてその実人は人々に(シエナの聖カタリナ)」

視覚を変えて

ドミニコ会 Sr.中村節子

「シスターその後のハラグアイは如何ですか。「ハア？」何とも返事のできない問いかけでした。

私たちはかつてパラグアイで宣教活動に従事してまいりました。当時は私達も含めて、南米のどの辺に位置しているのか、なじみの薄い国でしたが、新しい国や土地に行く、いろいろなことを体験しました。

ある日修道院にひとりのパラグアイ人の男性(大男)が尋ねて来ました。

「隣のセニョーラが急に入院することになつたので、衣類やタオルが欲しいのです。」といつので、必要な分を渡したのです。...

と、また二時頃、今度は自分のものが欲しいといつのです。ちよつとドキツとしました。一度あることは必ず二度ある。しかも三度目は盗みにくる。ということも予備知識で知っていたのです。

その晩、お祈りをして居る時、その定例会前でも車の軋む音と共に、カーステレオが鳴り出したのです。兎に角お祈りを(何時もより声高く)終わらせました。相変わらず同じ場所ドライバートも同じ姿勢です。一人とも恐怖感からイライラしてきたのです。この男性に朝接したシスターが「やつぱりたしかめてくる。」と、玄関から出たらすぐ鍵をかけるこ

と、一人は何かあればすぐ通報できるように電話を抱え様子を見守る事にしました。

しかし、何の事はなかつたのです。町の方からのライトで木の枝が車のシルエットのよつに見え、音楽は何時モ夜になるとかなでるものでした。

そこで二人で話し合ったのです。宣教地でやまよすると異常に緊張しやすい中で(一年目の出来事)自分たちで勝手に想像することが多いのではないか。ありのままを受け入れることこそ大切だといふ事、物事や問題、人を見る目は何時も同じ視覚から見ているので堂々巡りをする事が多いのではないか。

何か事が起こつたり、問題の解決の一助として視覚を変えて考え、深めることの大切さを身にしみて感じました。

それから、地域の方々や教会に来る現地の人々との関わりの中で、幅広くみつめなおし、話し合うことによりお互いに持っているよい面にも気付くようになりました。

「神の国の来たらんことを!」願うときの大切な心を深く学ばされました。

「シスターその後のハラグアイは如何ですか。」この言葉も、ワールドカップのパラグアイチームのめざましい働きによって、サッカー国として南米の一隅から頭角を現し、パラグアイ共和国の名前も知られるようになって来たよつです。